

美術館のある風景 (第17回)

今美術館に必要なこと 〈その三〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



三菱一号館美術館
「ヴァロットー冷たい炎の画家」展
家族プログラムでの鑑賞風景

(3) 若い世代のための美術館は？

私は実は子供の頃、と言っても遥か50年も前のことですが、家族で船に乗り、往復80日をかけてフランス・パリに赴いて1年を過ごしました。一般の海外渡航が解禁されたばかりで、1ドル360円の固定レートでしたし、未だ日本人学校もなかった時代ですから、結局現地校にも行かずに1年間を遊んで過ごしました。それは子供にとって、ある意味天から突然降ってきた贈り物のようなものでした。フランス語を学びつつ、空いた時間をほとんど街歩きに費やしました。中でも、教会と美術館は好きな2大スポット。当時はまだオルセー美術館もポンピドゥー・センターも無かったので、もっぱらルーヴル美術館が中心でした。確か木曜日だったか、1週間に一日無料公開日があり、その日は日がな一日広大な展示室を隅から隅まで見て歩きました。今のように年間1,000万人（2012年）も観客が押し寄せることも無く、展示室は静かで、監視員とも顔なじみになるくらいでした。神秘的なエジプトやメソポタミアの部屋がとりわけお気に入りでした…。

何を話したいかと言いますと、私にとっては天国のように楽しかった美術館を、どのようにしたら若い人たちにも受け止めてもらえるかということなのです。例えば、当館で去年の10月から開かれていた「ボストン美術館 ミレー展—傑作の数々とその真実」が1月12日に閉会しました。お陰さまで12万6千人あまりの来館者がありました。その過半数は60歳から70歳代の方でした。また、ある美術大学で私が授業をした時、「美術館

に行ったことが無い人は？」と尋ねると、なんと半数近くの学生が手を挙げたのです。美大生のそうした現状に、本当に驚いた記憶があります。

確かに、日本の美術館のコレクションや展覧会が若いクリエイターたちを絶えず惹きつけるほど魅力的か、という根本的問題はあります。でもその前にまず、立地やアクセスの条件が大きな問題です。多くの海外の国・公立美術館では、街の一等地にあり、一般の人々が入場料無料のところも多いし、少なくとも美術家や美術を学ぶ学生たちは無料または格安の料金では入れるところが殆どです。それに引き換え、日本では公立の美術館は同じく後発の存在であるサッカー競技場と共に、まず街外れに造られます。街の中心から1時間も2時間もかかる辺鄙な場所にあることも珍しくありません。これではなかなか足が向かないのは当然でしょう。

他方、先日台湾を訪問した際、各都市の公立美術館がどこも年に数十万人の入場者を集めていることを知りました。小・中・高校の授業の一環として、学生は皆小さい時から来るそうです。よく「12歳ごろまでに親と美術館に行ったことが無い子供は、一生来ない」と言われます。たぶんその通りで、元ルーヴル美術館館長・ローザンバール氏も仰っていましたが、おそらく美術館側の努力だけではなかなか難しく、教育のシステムを根本的に見直すべきなのです。海外の美術館ではよく見かける、作品を前に子供たちが先生と語り合う和やかな光景を、もっともっと日本でも見たいものです。